

11月17日 ぱれっとJOYOにて

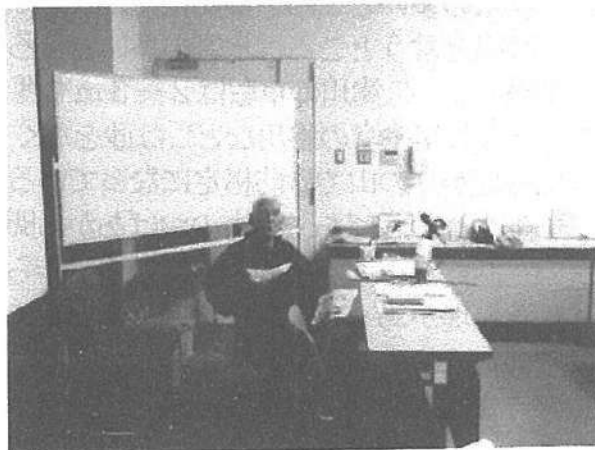
森澤昭夫さんの寺田李のお話に36人が参加

11月17日(日)に本会が主催し、山背古道探検隊の方々の協力を得て開催した「なぜ、巴旦杏は寺田李(ヌメ)になったのか 森澤昭夫さんのお話し」は予定の20人を大幅に上回る、36人の方が参加され、盛況の内に終えることが出来ました。お話の様子をお知らせします。

「なぜ、巴旦杏は寺田李になったのか 森澤昭夫さんのお話し」の概要

最初に司会の杉浦会長からこの会を開催した経過について、6月に和訶羅河9号をマスコ発表したところ、森澤昭夫氏のご先祖が品種改良された寺田李についてのお問い合わせが多く寄せられました。そこで森澤さんに講演を依頼しましたところ、ご了解を得て今日の講演会の開催の運びとなったことが紹介され、山背古道探検隊の皆さんや地域の方々のご協力、城陽市教育委員会の後援も得て講演会が開催された旨の説明がありました。

また、森澤さんからは京都府写真帖(明治38年)や木盃、そして茶杓などの作品をお持ちいただきました。寺田李のお話をする森澤氏



森澤昭夫さんのお話

森澤さんは農作業用の上着を着てお話を始められました。

ご紹介いただきました、森澤です。私のご先祖さん、森澤善吉が寺田李をつくりました、ところが戦争で李どころではない、米やイモをつくれと言うことで無くなっていきました。

私は昭和3年の生まれです、13歳の時、テテ親に死に別れました。昭和9年に寺田小学校にありました。1・2年生の時が西村先生、この人は寺田村村長の西村儀一さんの奥さんです。3・4年生が中西の三縁寺の櫟さん、5年から高等科2年までは上野先生です。歴史を良く知る先生で、私のご先祖が寺田李を作り出したことを繰り返し教えてくれました。私はそのことをよく覚えています。

昭和18年頃には戦争が激しくなって食糧増産が叫ばれてきました。李を切って食料になるもの、稲やイモなどをつくらないかんと言うことになり李が切られていきました。もったいないと思い、切られた李の木で何かできないかと思っていたところ、昭和57年頃、茶杓を100本つくって来いと言われ、作りました。その後、大丸などで実演販売をしていきました。城陽で国体が行われ高松宮さんが来られ、お礼として市長から城陽の木、梅、紅梅・白梅で私がつくった茶杓が贈られました。